

村尾嘉陵の『江戸近郊道しるべ』にみる行動と心性

鈴木章生

はじめに

江戸・東京という巨大都市をどのように理解したらよいかといった研究が隆盛を極めている。筆者はこれまで、日本近世史の立場から江戸の内外に点在する「名所」や現世利益をもとめて参拜行動をする「社寺参詣」に注目して、近世中後期の都市社会に顕著な行動を伴う一連の文化現象、すなわち西山松之助氏のいうところの「行動文化論」の実態解明を行ってきた。その主たる研究の対象は、都市の中における人の移動を伴う交通の問題であるとも言ってもよい。人が移動する目的対象地として名所、盛り場、神社仏閣などに着目し、人びとが出かけていく景勝地や由緒ある史跡を確認し、江戸っ子の祭礼や年中行事の意義を探り、盛り場の人びとを駆り立てる吸引力の検証にあたった。^③

旅や社寺参詣の研究動向に関して筆者は、「都市内外での近距離の社寺参詣や小旅行の実態把握」を提言したことがある。^④江戸、大坂、京、名古屋などの都市部における社寺参詣・物見遊山の実態を明らかにするとともに、都市文化の展開を明らかにしつつ、都市機能の性格

を考え、江戸に住む人びとの行楽や旅をする内面的理解に迫りたいと考えているからである。

江戸および江戸周辺のどこへ出かけているかを知る資料は、名所案内や名所図会のような版本、懐中に入る小冊子や一枚刷りの地絵図、名所絵などの錦絵の類となることが多い。しかし、これらは名所や神社仏閣や風景を紹介した出版印刷物であって実際の行動記録を確認するものではない。そこで、実際に人が江戸のどこへ出かけているかを把握するには旅日記の類を用いることとなる。

先頃、山本光正氏は江戸の諸施設などを中心に見物する都市型観光の実態について、東国出身の十二人の旅日記を題材に分析した。四日・五日程度の短期滞在と十五日前後の長期滞在に二分される傾向を把握しつつ、いずれも定型化された同様な観光コースを雇い入れた案内人とともに巡ったという。^⑤ところが、山本氏の分析は東国から伊勢参宮に向かう途中で江戸見物をした場合に限定しており、西国や江戸近郊からの江戸見物の実態を把握しているわけではない。さらには、江戸に住んでいる者の行動については触れられてはいない。

そこで本稿では、江戸在住の人間がどのような名所に出かけていき、

どのような神社仏閣に参詣していたか、一例ではあるが本人自身が書いた紀行文を分析しながら行動の実態を見ていくことにする。さらに、紀行文の中に書かれた字句の解釈から、行動の背景にある内面的な理解に迫りたいと考える。

一、村尾嘉陵と紀行文『江戸近郊道しるべ』

村尾嘉陵の名は村尾正靖、字は伯恭、通称源右衛門、嘉陵と号した。嘉陵は宝暦十年（一七六〇）に生まれ、天保十二年（一八四一）五月二十九日、数え年の八十二歳で亡くなる。嘉陵の曾祖父が、将軍家重の子重好に始まる御三卿の清水家に仕えたことから、村尾嘉陵もまた御広敷用人として職務をこなした。城や大名屋敷では奥方などがある男子禁制の建物が三つ程あるが、そのうちの御広敷だけは男子の出入りが許された建物であった。その建物で奥向きの仕事を務める役人には、事務処理を中心とするものと警備・監察を主たる仕事とするものとの別れているが、御広敷用人とは事務官系の最高責任者にあたり、奥向きの業務全般を取り仕切る有能な役人がその任に就いた。ところで、この嘉陵には『嘉陵紀行』と題する紀行文があり、大正五年（一九一六）に「江戸叢書」第一巻に収録されている。その底本は内閣文庫所蔵の五編二十冊からなる絵入りの写本で、万延元年（一八六〇）に堅斎守興の写したものだということがわかっていゝ。しかし、嘉陵以外の記述のものも認められており、その経緯は未だ不明な点多い。

自筆本については国立国会図書館に『江戸近郊道しるべ』（見返しには「江戸近郊道しるべ 四方の道草」と題する紀行文が二十六冊所蔵されている。書名は後筆のようで、虫損、欠損が多い。また同館には嘉陵の子どもの義遠・義郷の手による写本『四方の道草』が九冊存在する。全十冊のうち一冊欠本にはなっているものの写しの状態は良く、自筆本に最も近い写本である。したがって嘉陵の紀行文に関する基本文献は、この三つの自筆本を含む三件ということになる。

本稿で分析の対象とする資料は、国立国会図書館所蔵の自筆本を中心に、嘉陵の子どもの写しとされている九冊の写本を照らし合わせ、嘉陵の紀行文とわかる個々の文章にタイトルのあるものだけを抽出して分析してみたいと考える。その大半はすでに東洋文庫において翻刻されており、本稿もまたそれを活用して論考を進めていく。

その一覧が次に掲げる表の「村尾嘉陵の江戸近郊めぐり一覧」である。対象となるデータは四十一件。嘉陵四十八歳から七十五歳までの行動を紀行文から抽出した結果である。また、図1の「村尾嘉陵の旅の範囲」は、嘉陵が旅をした対象地を現代地図の上に分布で示したものである。

なお、本稿では嘉陵の行動を「旅」として表現することにする。嘉陵自身はこの行動を旅と明言しているわけではない。距離的にも比較的短い日帰りがほとんどのこの行動を旅と位置付けるのはいささか腑に落ちないものがあるが、ここでは言葉の解釈と実態との整合性は求めず、便宜的に「旅」で統一して使っていくことにする。

さて、この表からわかることや特徴をいくつか指摘してみたい。ま

表 村屋嘉陵の江戸近郊めぐり一覽

No.	国会自筆本題名()は写本題名	年月日	年齢	行き先	目的	出発地	時間推移	備考
1	(下総国府台)、真間の道芝	1807(文化4) 3. 7	48	遍覧寺・弘法寺(千葉市川)	参拝・古跡めぐり	浜町	未明→	同伴・舟
2	(府中道の記)	1812(文化9) 1.17	53	六所明神他(府中)	参拝	濱水	未明→申→戌	同伴
3	(谷原村長命寺道草)	1815(文化12) 9. 8	56	長命寺(練馬区)	参拝・碑文	濱水	四→九	同伴
4	(日曜寺愛染明王参拝の記)	1816(文化13) 1.12	57	日曜律寺(板橋区)	参拝	無記載		
5	(上高田村水川神社道草)	1816(文化13) 3. 7	57	上高田村水川社(中野区)	碑文	濱水	九	同伴
6	(吹上観音道草)	1816(文化13) 8.20	57	吹上観世音(埼玉和光)	参拝		五→五半	
7	井の頭紀行	1816(文化13) 9.15	57	井の頭弁才天(三鷹)	参拝	浜町	巳→四	舟
8	半田いなり詣の記	1817(文化14) 6.15	58	半田稲荷(葛飾区)	参拝	浜町	五	
9	(小金の牧道草)	1817(文化14) 9. 7	58	小金の牧(千葉柏・松戸)	牧の馬見物	無記載	五	
10	大師河原にあそぶ記	1818(文政1) 5.26	59	川崎大師(神奈川川崎)	参拝	濱水	しのめ	西永代橋
11	(志村に遊ぶ記)	1818(文政1) 5.27	59	新座、志村・赤塚・小豆沢(板橋区)	遊山	～深川		
12	(成子成願寺・熊野十二社紀行)	1818(文政1) 8.26	59	成願寺(中野区)、熊野(新宿区)	参拝・古跡めぐり	無記載		同伴
13	南郊看花記	1819(文政2) 3.25	60	芝(港区)、品川(品川区)、池上(大田区)	花見	無記載	辰→申→五	
14	小金井・府中再遊	1819(文政2) 4.28	60	小金井(小金井)	花見・古跡めぐり	無記載		
15	川口善光寺に遊ぶ記	1819(文政2) 4.17	60	川口善光寺(埼玉川口)	参拝・遊山	無記載		
16	羽沢水川・茨谷八幡・伊勢野 道の折枝	1819(文政2) 8. 1	60	茨谷八幡宮・法如庵(渋谷区)	参拝・遊山	無記載		
17	(谷古田八幡宮参詣の記)	1819(文政2) 9.25	60	谷古田八幡宮(埼玉川口)	参拝・間	無記載		
18	中山道大宮紀行	1819(文政2) 10. 4	60	上尾・桶川(埼玉)	山見	やど	寅→五	
19	上めぐる村に遊ぶ記	1820(文政3) 3. 4	61	目黒富士(目黒区)	遊山・花見	やど	→日暮頃帰宅	
20	小日向道永寺・柏木村円照寺	1820(文政3) 3. 5	61	道永寺(文京区)、円照寺(新宿区)	花見	無記載	六にて中止	一戎帰宅
21	六地藏もふでの記	1821(文政4) 8.11	62	正元の六地藏(江戸周縁)	巡拝	(浜町カ)		帰りに舟
22	明玉院に楓を訪ふ記	1821(文政4) 10.24	62	明玉院(目黒区)	紅葉	無記載		
23	船堀・宇喜多・猫実	1822(文政5) 8. 3	63	船堀・宇喜多・猫実(江戸川・浦安)	遊山	無記載		
24	石神井の遠くさ	1822(文政5) 9.11	63	石神井弁天(練馬区)	参拝	無記載	→七令井→点灯後帰宅	行徳船
25	谷中に遊ぶ記	1823(文政6) 3.12	64	天眼寺他(台東区)	墓参・花見	無記載	あけぼの一五	
26	藤福荷に詣でし道くさ	1824(文政7) 9.12	65	藤福荷(新宿区)	虫聞き	無記載		
27	岡の秋かせ	1825(文政8) 9.13	65	西福寺(港区)、目黒不動(目黒区)	先祖墓参・遊山	無記載	→六	
28	(大宮八幡宮道しるべ)	1826(文政9) 4.28	67	大宮八幡(杉並区)	参拝・古跡めぐり	無記載		
29	(阿佐谷村神明道の記)	1826(文政9) 10. 4	67	阿佐谷神明(杉並区)	参拝・遊山	無記載		
30	綾瀬・千住・花又村鷲明神詣の記	1827(文政10) 8.28	68	花又鷲明神(足立区)	参拝	浜町	巳→酉	
31	千束の道しるべ	1828(文政11) 7. 2	69	中延八幡(品川区)	参拝	三番町	辰→六	
32	新曾妙顯寺詣の記	1828(文政11) 10.18	69	妙顯寺(埼玉戸田)	御礼参り	(三番町カ)	→八折返し→申志村	
33	(六阿弥陀道のり)	1830(文政13) ~	71	六阿弥陀詣で	巡拝	(浜町カ)		
34	(八幡詣の記)	1831(天保2) 6. 9	72	八幡詣で	巡拝	三番町	明け→六帰宅	
35	代々木八幡宮道の枝折	1831(天保2) 8. 8	72	代々木八幡(渋谷区)	参拝	(三番町カ)	→六半	
36	高田村天満宮詣の記	1832(天保2) 8.19	72	真定院・穴八幡(新宿区)	参拝・扁額見物	濱水家	牛→善	富士塚
37	瀬田村行禪寺・奥沢村九品仏道しるべ	1831(天保2) 9. 3	72	行禪寺(世田谷区)	遊山	(三番町カ)	牛善福寺	7~8里
38	瀬田村道くさ	1831(天保2) 9. 6	72	正福寺(墨田区)、善福寺(葛飾区)	遊山	無記載	四→六	八十八カ所
39	蓮野井村正八幡宮参詣、善福寺・井草妙正寺池	1832(天保3) 5. 9	73	善福寺井草妙正寺(杉並区)	参拝	三番町		八十八カ所
40	百草道の池井高島不動尊詣共	1833(天保4) 10. 1	74	松蓮寺(日野)	参拝	三番町	未明→高止まり	同伴
41	真間の道芝	1834(天保5) 10. 9	75	葛飾真間辺、手古奈(千葉真間)	参拝・遊山・山見	三番町	六→日暮失切り	

註) NOの数字は図1と対応。行き先および目的は筆者が抽出した地であり解釈に基づく。出発地の()は推定地。時間推移は、出発時→到着時を基本とし、～は途中の時間を記す。

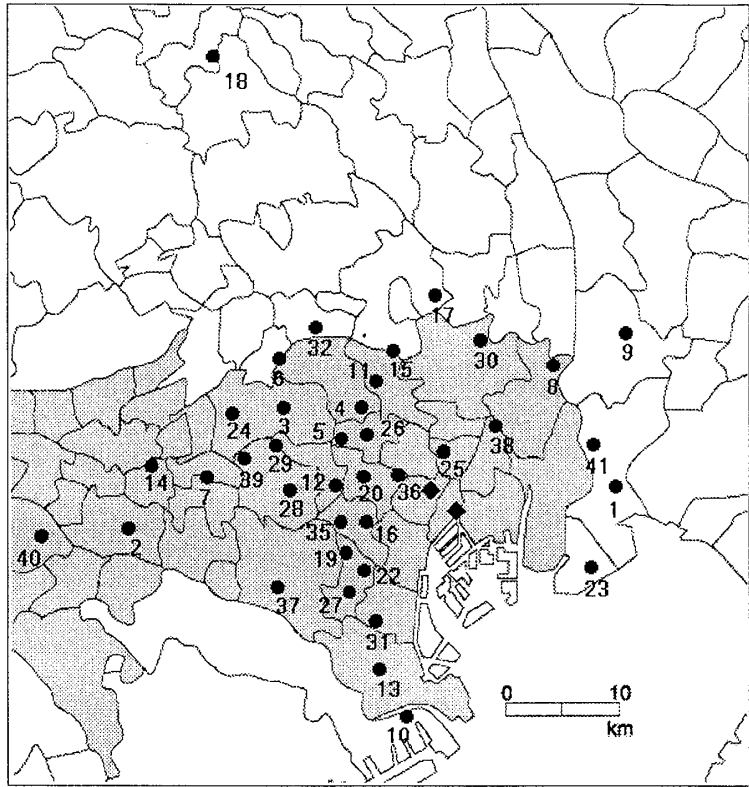


図1 村尾嘉陵の旅の範囲

◆は住まいの位置。●の番号は表に対応する。

ず旅の年月日では、嘉陵四十八歳から七十五歳までの三十年近い年月のなかで何度も出かけていたことがわかる。最後七十五歳にして41の「真間の道芝」では現在の千葉県真間にまで日帰りで旅をしたというのは驚きである。

旅に要した時間を見ると「未明」から出かけているものもあるが、午前八時から十時頃に出発することが多い。ちなみに一番早く出かけて行ったのは18の「中山道大宮紀行」（現在のさいたま市）の寅の刻（朝四時） 出立から五ツ（午後八時） 帰宅の例がある。また、40での

「百草道の池井高島不動尊詣共」で宿泊を伴った旅があるが、それを除いて最も遅くに帰宅した時間は四ツ（午後十時）であった。つまり、六十歳、七十歳の高齢者である嘉陵の旅のほぼすべてが日帰りで行われていたことを考えるとその健脚ぶりに目を見張るばかりである。

出発地については記述していない場合も多い。それでも「浜町」「三番町」の文字をいくつか抽出することができる。この地名が関係するのは清水家の屋敷が所在する位置にある。清水家は漬水御門内にある屋形（館、屋敷でなく屋形を用いている）に田安家と並ぶように存在した。宝暦九年（一七五九）十二月に九代將軍家重の次男重好が徳川宮内卿を名乗り、十萬石を与えられて創立したのが御三卿清水家である。浜町には下屋敷に相当する屋形があり、7の「井の頭記行」では冒頭に「浜町賜舎宿りを出る」とあることから、嘉陵がその地に住んでいたことを確認することができる。後に嘉陵は麴町三番町（千代田区九段南二丁目）に住まいを移転するが、その時期は三番町の地名が多く出てくる文政十年、つまり斉明の死後ではなかったかと表から推測する⁹⁾。森銚三氏もまた嘉陵が浜町から麴町三番町に移ったことを指摘しているものの、いつ移転したかは明確にしていない¹⁰⁾。

嘉陵の日帰りによる旅の特徴はたくさん挙げられるが、微細なことでは同伴者の存在や籠や舟などの乗り物を使った場合をいくつか認めることができる。また、行き先と目的の箇所を見てわかることは、その多くが社寺への参拝に出かけているということである。しかし、表に記載した目的は、筆者が紀行文を読み込んだ上で何らかのキーワードや旅の目的を解釈したもので、現代の神社仏閣めぐりの旅もそうで

あるが、宗教施設で参拝しただけで嘉陵の真の信仰の表れとは単純には認められるものではない。

嘉陵の行動を理解する上で最も重要なのは、旅先としてどこを選んで出かけて行ったかを把握することであろう。表ではなかなか全貌が見えないので図1を参照してほしい。嘉陵が旅をした地域の分布状況、大雑把に理解するならば、西に多く、東に少ないという傾向が見て取れる。しかも、東海道に沿った領域、青山通り、甲州道中、中山道、奥州街道、行徳・水戸街道に沿って分布する状況が見られる。このことは江戸の都市構造が放射状に展開する街道や脇街道を使って、嘉陵が江戸の郊外へと出かけていく様子が理解できるのではないだろうか。

分布状況が示すこの図からは、嘉陵が旅をした地理的範囲を知ることが出来る。その範囲とは日本橋近辺を中心とするならば、およそ半径約十六から二十キロメートル内（四里〜五里）にはば納まっていることに気づく。人間の歩く速さを考えるならばこの範囲は四時間から五時間相当歩くことになり、往復すると一日。つまり、人間工学的にも日帰りが可能な合理的な範囲であると言える。この特徴は人間の歩く距離と時間の適正な範囲の中に名所や行楽地が形成されるということを示す指標にもなる。

二、村尾嘉陵の行動とパターン

嘉陵の紀行文から実際の行動をいくつかのパターンに分けて提示を

してみた。パターンとしてあげた事例は全部で五つある。それぞれ図2の「村尾嘉陵の行動パターン」、図3の「六地藏もふでの記」にみる村尾嘉陵の行動軌跡によって主要な経路と地名を記したので、参照して欲しい。

(1) 直線的行動

①直往復型 このパターンは文字通り目的地に直行するような直線的行動が特徴である。ここでは7の「井の頭記行」を例に取り上げて嘉陵の行動を追ってみることにする。

文化十三子のとし九月十五日、井の頭弁才天にもふで侍らんと、朝巳の刻（午前十時）過る頃、浜町賜舎宿りを出、市谷御門を出、尾張御殿やしき前より自性院前通りを過、三光院いなり前より行々て、左へ折て成子通りへ出、中野より又左に折て、堀の内妙法寺に参る、こゝにて午の半過る頃と云（後略）^①

ここに記述したように通過点を列挙しながら目的地である井の頭弁才天まで淡々と直進する。途中主要な神社仏閣に足を止め様子を記述しているものの、大きく進行方向を変えてまで寄り道をしているわけではない。あらためて主要な地名や建築物を書上げると次のようになる。図2によってその直行ぶりが確認できよう。

浜町↓市ヶ谷↓尾張御殿↓自性院↓三光院稲荷↓成子↓堀の内妙法寺↓大宮八幡宮↓下高井戸↓上高井戸↓久我山↓井の頭弁才天

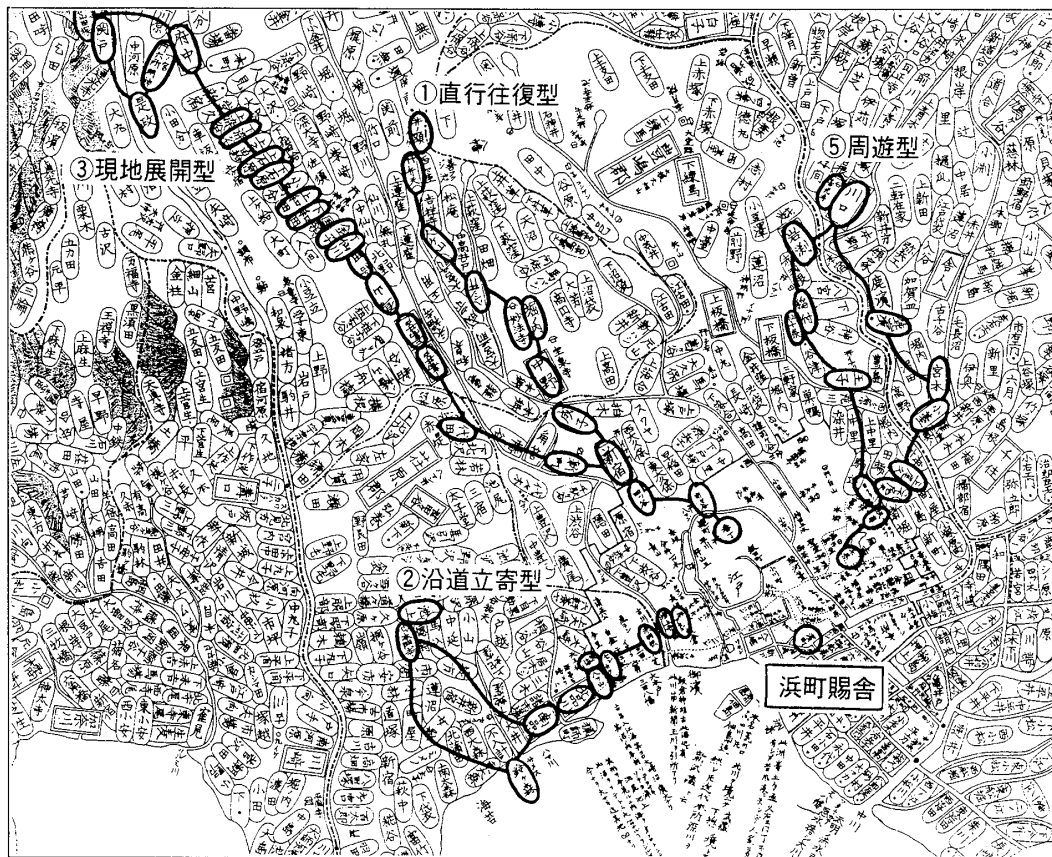


図2 村尾嘉陵の行動パターン ベースは「武蔵国全図」安政3年(1856)

②沿道立寄り型 この行動パターンの特徴はとにかく沿道各所に寄り道をしながらい進んでいくのが特徴である。それは花見などの自然の移り変わりを愛でる季節にあって、江戸市中の神社仏閣にある桜の木を訪ねては花見に興じる13の「南郊看花記」がこのパターンを代表している。

文政二己卯のとし三月廿五日、南郊の花見ばやと、辰の刻(午前八時)ばかりやどを出、朝まだきは空うすぐもりて、ふりもやせんと覚束なかりしも、芝の辺に行ころより空はれて、ことに風さへなく長閑也、小袖一きてあつき程なりけり、あたこの山つゞき、切通しの坂をのぼり、少しひぢ折てゆけば、増上寺の乾の門あり、入てゆくて右に柳、さくら、あまたうへられたり(中略)すこし行て、道のかたはらに山あり、石階をのぼる事しばらくにして、上に白金いなるの祠あり、この山のふもとみな花なり、ことに鳥居の右ひだりにある二もとは、八重の薄いろなるが、今日をさかりのながめたぐひなし(後略)

花見といえは上野や飛鳥山といった固定的な名所があるが、実際には江戸市中の神社仏閣には桜の木が多く植えられ、一本桜や枝垂桜などの有名な寺社に詣でたりする。それもまた花見であり、有名な桜などは名所案内で紹介されることも多い。あらためて目的地までの主要な名所や神社仏閣を書き出してみると次のようになる。

やど(浜町) ↓ 愛宕山 ↓ 切り通し坂 ↓ 増上寺 ↓ 白金稲荷 ↓ 赤羽門
↓ 麻布聖坂 ↓ 麻布聖坂 ↓ 長応寺 ↓ 泉岳寺 ↓ 如来寺 ↓ 御殿山 ↓ 東海寺 ↓ 松平陸奥守屋敷 ↓ 来福寺 ↓ 千軒台 ↓ 西光寺 ↓ 名主五蔵宅 ↓ 八

景坂↓鈴の森↓池上↓本門寺↓大森

神社仏閣が実に多く列挙されていることに気が付く。図2のなかでも比較的狭い範囲を花に浮かされた千鳥のようにあちこちと足を運ぶ様子が窺い知れる。嘉陵の花見のあり方として神社仏閣を訪ねながら桜を愛でるといふ習慣があったことを理解するのである。

③現地展開型 このパターン行動は目的地までは比較的まっすぐに進むが、目的地に到達するとそこを拠点として周辺にある神社仏閣や史跡・名勝などたくさんの名所を訪ねる。現地に到着するや周辺の名所を集中的に見て展開する動きがこの型である。この行動パターンでは2の「府中道の記」を例に見てみよう。

文化九のとし睦月の十七日、国府の六社（大國魂神社）の神にまうでんとて、おなじ心のもとかたらひて、まだ夜をこめて出ぬ、四谷より内藤新宿を南に横折て、新町通りを行、こゝに小名牛蒡といふ所の路の左に、神明宮立せ給ふ、（中略）そこを過れば、府中宿、新町、本宿などの差別ある、いよいよ風吹て、余寒ことに身にしみ、足もつかれたれど、先六所明神に参りてこそ、ものも食めとて詣る¹³

とあり、この後蔭山某の案内で府中や関戸の渡しを越えることになる。出発からの主要な地点を列記してみると次のようになる。

四谷↓新町↓代田↓下高井戸↓上高井戸↓鳥山↓給田↓下仙川↓
下布多↓上布多↓下石原↓上石原↓下染屋↓上染屋↓府中↓六所
明神↓妙高寺↓玉川端↓関戸の渡し↓小山田の関

府中に到着した後、案内を頼み、その案内のもとで玉川流域を含む周辺の名所旧跡めぐりを展開している。図2においても府中を拠点に展開している様子が理解できよう。

（2）周回的行動

④巡拝型 このパターンを最も強く示している事例は、21の「六地藏もふでの記」、33の「六阿弥陀道のり」、34の「八幡詣の記」がある。ここでは「六地藏もふでの記」を取り上げて行動の軌跡を見てみたい。図3は六地藏を詣でた際の実際の行動軌跡を地図上に示したものであるが、江戸の周縁部を一周しながら、地藏坊正元がつくったという蔵は、街道筋の江戸の玄関口にあたる地に、一番品川品川寺、二番四谷太宗寺、三番巢鴨真性寺、四番山谷東禅寺、五番深川靈巖寺、六番深川永代寺の六つが配置された。この六つの地藏を順に回って参拝しようというのがここでの嘉陵の行動となる。

かくて今日うちにぐしゐなんには、いよゝ心うからんに、洲さき（江東区）の海辺見にとて先深川の永代寺に参る、こゝに正徳の初め正元法師がつくれりし金銅の地藏尊あり、門を入て右のかたに、石がき高くつきあげて、上に像を安ず、おがみはてゝおもふに、海辺行て海みんも、心はるけなんにもあらじ、こゝを初めに、かれがつくり置し六所の地藏尊を、今日なんおがみめぐらばやとて、同じ所の寺町靈巖寺に参¹⁴

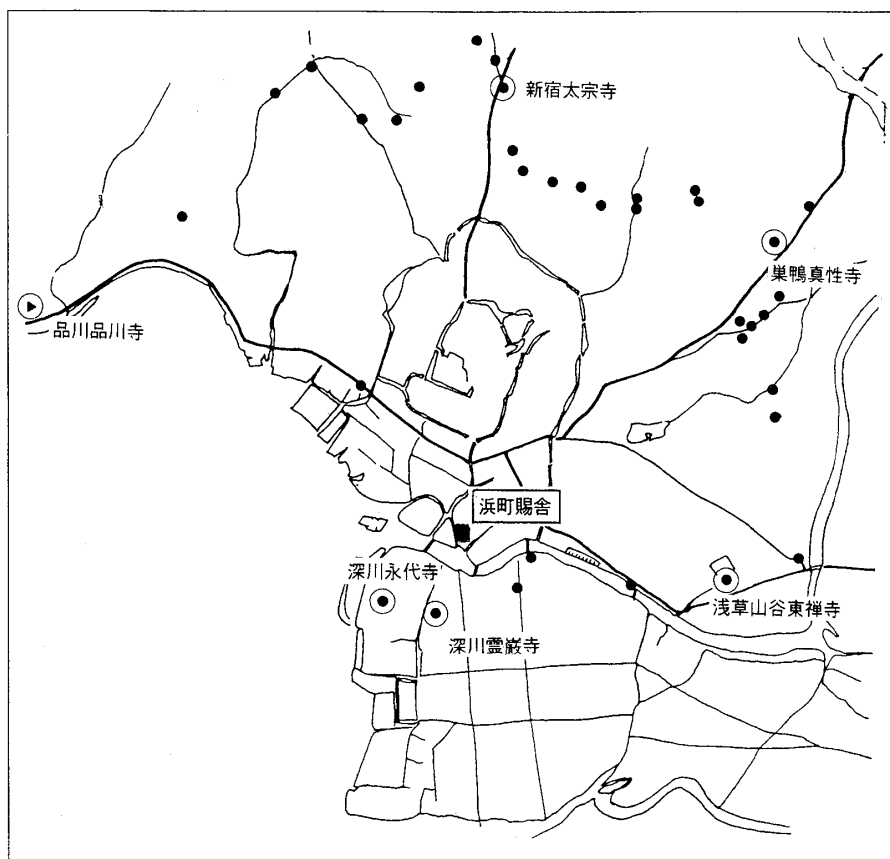


図3 「六地藏もふでの記」にみる村尾嘉陵の④巡拝型行動の軌跡

最初は清水家の法事に関する行事があって、御広敷用人として朝から激務をこなしていたようである。そのことは次のような経緯から嘉陵の精神的負担や暑さが老体にこたえていた様子が窺える。

葉月の十一日は、うちく御ひとめぐりの御忌の日なればとて、君よりは女房して上野に御花まいらせらる、もとの御附の女房あ

またまいる、おくの御仏間にとて、利頭、おのれ（嘉陵）、直温は、心ばかりの御花さくぐ、なにくれ思ひつゞくるすぢもあれば、この比より、いとく心くるしく、今日もことさらに、のこるあつさくへ、たへがたきを、いかにくらさましと、老の身をもてあつかひつるを、しる人もなし^⑮

そこで、暑さから最初は洲崎の海へ行く予定であったが、途中の深川永代寺に詣でたことが六地藏を巡るきっかけとなった理由のようである。そこで具体的な経路については、永代寺からはじまって時計の反対周りで江戸の周縁を大きく回ることになる。沿道でどこへ行っただか、また何を見たかを列挙したいが、かなりの数なのでここでは省略するが、その代わりに嘉陵のこの日の最後の行動を以下に記してみたと思う。

こゝにて、くれ六（午後六時）のかねなり、月雲間にはれつくもりつ、野路の露いとふかし、猶ゆけば鮫津（品川区）までも行べけれど、こゝらののみちには、まむしと云ものゝ多きに、草ふみわけてゆきたらんに、もし足をかまれなんは慮なきに似たれば、かさねてぞかしこに参らめと、はるかにおがみて、かへさにおもむく^⑯

結局、新宿太宗寺を回って、残る品川品川寺の地藏に向かう途中で暗くなってしまう時間切れとなったようである。疲れたので汐留から舟を出して戌の刻（午後八時）過ぎに帰宅している。

⑤周遊型 周回型のパターンとして同じように周回をするもので、巡

拝というよりは身近な神社仏閣を詣で、季節の移り変わりを楽しむ周遊型ともいえる行動がある。その事例が15の「川口善光寺に遊ぶ記」である。ここでは主要な経路だけを地名や神社仏閣の名称を踏まえて示すことにする。

坂本（台東区下谷）↓日光御門主本坊↓宗福寺↓下尾久↓上尾久
↓小田井（小台）の渡し↓小田井（小台）↓堤↓宮城↓延命寺↓
鹿浜↓川口↓善光寺↓川口の渡し↓稲附↓静勝寺↓十条↓王子稲
荷^⑧

この行動の道筋は図2でも示したように、不忍池の脇から上尾久へと向かう今の不忍通りを抜け、そして荒川を越えて小台へと渡る。そして小台通りを川口に向かい、再び荒川を渡って岩淵に戻り、王子からは本郷通りを通して戻る周遊コースとなっている。同じ道を通ることなく、ぐるっと回って帰ってくるパターンであることがわかる。

以上、嘉陵の行動を直線的行動と周回的行動に分けて五つのパターンを見てきた。小括すれば次のことが指摘できる。まず、旅にかける時間を考えるとき、巡拝型と周遊型は時間がかかる。しかも移動距離も長くなる傾向にある。一方、直線的行動の直行往復型や現地展開型は現地に行くまでの直線的な経路では短時間での移動となり、その分現地で十分見聞し、楽しむことのできる目的行動のはっきりした旅であったといえる。また、沿道立寄り型の場合は時間をかけずに近距離を回ることが特徴の一つであるが、できるだけ多くの地を見て回ることが目的とした行動パターンで、江戸市中の各所で行われる行事や盛り場を見て歩くにはこうした立寄り型のケースが必然的に多くなるこ

とが想像される。

嘉陵の行動も、目的と距離、そして時間をどのように使うかによって行動パターンに変化が起こり、多彩な行動を示す要因となっていると考えるのである。

三、嘉陵の旅の心意

江戸時代の旅を考えると、必ず旅の目的が何であるかが問題にされる。そこでは信仰か娯楽かといった二項対立的な議論が、本来多彩な旅のスタイルを固定的で閉塞的なものにイメージ化させてきたように思われて仕方がない。信仰も、娯楽も、旅をする人にとって大事な目的であったとすれば、江戸時代にあっても旅をすることの目的や意識はさまざまな性格を持っていたと考える。そこで嘉陵の旅の目的を紀行文から抽出し、多様な旅の性格を嘉陵の内面を通じて確認してみたい。

(1) 旅の目的

まず参拝目的を単純に記している事例を紹介する。先に出了た7の「井の頭記行」では、「井の頭弁才天にもふで侍らん」と述べている。また、28の「大宮八幡宮道しるべ」では「丙戌卯月廿八日、堀の内妙法寺にもふで、それより大宮村八幡宮に参拝す」と具体的な神社仏閣の名前を挙げて、そこへ参拝することを明確にしている。しかしながら、ここで注意を要するのは、参拝先は明記してはいるものの、この

行為が純粹に信仰に基づくものかどうかを知る手立てがほとんど紀行文にはないことである。いわゆる観光行楽で宗教施設に立寄る記念参拝の類は現代でも多い。テキスト情報だけではその違いをはっきりさせることはむずかしい。

嘉陵の信仰に裏付けられた参拜行動として注目したいのは、32の「新曾妙頭寺詣の記」である。

孫女が生るゝ前に、安産の符こひうけ奉りしに、さはりなく生れて、母も子もことなくかたじけなさを申さんと、今日その符をふところにして新曾村の妙頭寺（埼玉県戸田市）に詣ふで侍り¹⁹

嘉陵は孫女の誕生を祈って安産祈願の符を求めていたようである。

「さはりなく生まれて」母子ともに健康であったことから、いただいた符をもって嘉陵はお礼参りに再び出かけたことがわかる一文である。一方、今日の私たちの旅行もそうであるように、旅には名所や由緒ある史跡を訪ねるとともに現地の土産物や飲食を楽しむといった世俗的な要素がついてまわるものである。嘉陵の旅にも参詣やお礼参りといった信仰を背景にした行動ばかりとは限らない。

18の「中山道大宮紀行」の冒頭を引用することでそれを検証してみよう。

中山道上尾（埼玉県上尾市）のあたりより、秋冬の際、空はるれば浅間の嶽みゆると、過し年伊納沢吉がいひしには、いつぞは行ても見まほしく思ひしかど、仕る道のいとまなみ、今日あすともだし侍りけるに、今年は、神無月たちぬれど、まだしぐれの雨も間遠にて、朝夕もさまで寒からねば、とみに思ひたちて、とらの

一点（午前四時半）ばかり、やどをいで、火ともして行²⁰

嘉陵がなぜ中山道の上尾まで足を運んだかという点、ただ浅間山を見たかったということである。たかが山であるが、嘉陵にしてみれば大事なことだったのであろう。「仕る道のいとまなみ、今日あすともだし侍りけるに」と宮仕えの身の上ゆえに日帰り程度しか江戸の外へは行けない。上尾まで行けば浅間山が見えるという情報を人から聞いて、いてもたってもいられず、まだ寒くない時期だからということ未明から提灯を提げて出かけていったようである。嘉陵の旅の目的に山を見るといふ趣味的な要因が窺えるのである。

（2）山と田舎を好む

嘉陵が山を見るのを好んだという事実は、他の記事からも知ることができる。40の「百草道の地并高畠不動尊詣共」を見てみよう。

百草村（日野市百草）は府中の西玉川の一ノ宮の渡りを、向ひに越て、一里半ばかり、そこに松蓮寺といへる寺あり、その山のながめ江戸の近郊に双ぶべきものなしと聞しかば、稲葉矩よしとうちくはかりて、かしこにと、夜をこめて三番町の宅を出²¹

2の「府中道の記」では、府中の六所明神こと大國魂神社に参拝することを目的とした嘉陵であったが、実はその経路において山稜の美しさに魅了されていたことが次の文章からわかる。

江戸よりこゝ迄は、路林木の際を出没するのみにて、目にとまるながめなし、こゝに至て初て、闊達として山壑の美をみる事を得、（以下、山名のみ列挙する。大山・富士・八王子・子の権現・秩

父・武甲) 諸山をみる、(中略) かたはらの民戸に腰かけて、この風景をうつす²²⁾

これら二つの文章を解釈すると嘉陵の個人的な性格や個性であろうが、山に対する憧憬の念や山を見ることの楽しみが人一倍強く表れており、江戸での宮仕えに日々窮しているなかで、江戸の喧騒と群集を離れ、江戸の郊外に見られる美しい自然の風景や遠く連なる山々の稜線に心を奪われていたというのが実状のようである。

ところで、嘉陵がこうまでして山に魅了されている原因は何であろうか。こうした嘉陵の特徴ある行動の背景には、江戸の内と外といった都市景観の変化を認識する視点を持っていたことも大きく関係するようである。例えば、3の「谷原村長命寺道くさ」では次のような文が見えている。

四家町を行きはて、東北をかへりみれば、森の中に大行院のいらかみゆ、今日眺望こゝにとゞまる、西北に望めば安藤対馬侯のやしきあり、その左側は鼠山なり、径より登りてみれば、南面打ちひらきて、落合の方の樹梢をみるのみ、南西の隅に木立みゆ²³⁾

四家町は四ツ谷のことで、大行院は鬼子母神の別当にあたり、安藤対馬侯の下屋敷は今のお茶の水女子大学辺りとなる。鼠山は新宿区落合四丁目に位置する。引用文章の冒頭で、「東北をかへりみれば」とあるが、嘉陵の位置をこの資料から確認するとき、江戸の内と外とのちょうど境界線上にあり、その位置からしっかり周辺地域の様子を記述していることがわかる。

さらに16の「吹上観音道草」でも江戸のすぐ外側に立ってさりげな

く江戸の内と外との対比的な世界に注目している記事がある。

浪きり不動を少し通れば岐路あり、そこより北に向けて行けば、左右畑なり、畔のすゝき、この月四日(文化十三年閏八月)の風雨にあれて、みなほうけたり、されど秋深きながめ猶たぐひなし。

(中略) しりかへりみれば、南に護国寺の山十四五丁が程にみゆ、東北をのぞめは加賀宰相殿の板橋の下屋敷の森見わたさる²⁴⁾

すすぎが風雨で倒れてしまったけれど、秋深い眺めに感嘆している様子が見受けられる。そして「しりかへりみれば」で再び、護国寺や加賀前田侯の下屋敷が見えると指摘する。これは先の「谷原村長命寺道くさ」でも同様の記述が見られたように他の資料にもしばしば見受けられるものである。どちらも嘉陵が五十六、七歳を迎えた時期で、江戸の内と外の境界に位置したとき、江戸の方を「ふりかえる」ことで江戸のシンボリックな建物である寺院や大名屋敷に注目していることがわかる。

こうした嘉陵の関心は、さらに29の「阿佐ヶ谷村神明宮の記」で嘉陵の景観変化に対する確実な気持ち伝えてい

こゝに至るに、田ある所を三たび過、そのあひだくは、はた或は木立のみにて、させるながめなしといへども、繁華に遠き境なれば、おのれが如き山林閑寂をあまなひ、淡泊をほりするものは、たのしからざるにあらず²⁵⁾

すこし手の込んだ文章ではあるが、阿佐ヶ谷までの通りには畑や木立だけで、たいした眺めがないことに落胆してゐるわけではない。「繁華に遠き境」の繁華とは江戸の市中、またはその賑わいを言うのであ

ろう。繁華な江戸とも遠い境界にあるのでこの場所は、田舎風情を好む者（嘉陵自身）にとってはとても楽しい場所であると指摘しているのである。

(3) 気晴らし

江戸の外へとやって来た嘉陵にとって、遠くの山々を見ながら田舎風情の風光を楽しむ様子を見ることができた。日帰りとはいえども嘉陵にとっては、充実した楽しい時間を過ごせたに違いない。では、なぜそうまでして繁華な江戸を離れて、江戸の郊外へと出かけていく必要があったのであろうか。その時の心情を10の「上めぐろ村にあそぶ記」と22の「明王院に楓を訪ふ記」の二つの記事から確かめてみたい。

この比、右大将の君の、あかもがさなやませたまふも、やうくさはやがせ給ふに、花もやうさきぬといへば、人しらず、いなかわたらひして、このごろの思ひくんじたる心をもなごめばやと、けふしも、とみに晴にたれば、ゆくりなくやどを出て、かたもあだめめず、まづ麻布までは来にけり²⁶⁾

ここでいう右大将の君とは、將軍家斉の二十三番目の子で齊彊とする説があるようだが²⁷⁾、ここは清水徳川家第四代、文化六年生まれの斉明が十二歳の時のはしかということと理解するしかないのではないかと考える。そのはしかもかなりなおってきたことから、「いなかわたらひ」して、このごろ思い悩んだ暗い気持ちをなごませようと、方向も定めずにまずは麻布まで来てしまったというのである。

ことしの秋は、みち宮の君の、この殿にうつらせたまふにつけて、

おのれがどもは、わきて、つかへのみちいとまなみ、星みて出、星みてかへる、されど神奈月には、その御事もはて、のどかになりぬれば、めぐろ明王院の紅葉みばやとて出たつ²⁸⁾

今年の秋とは文政四年（一八二一）十月二十四日で、この日兵部卿伏見宮貞敬親王の女英子が第四代斉明十三歳の妻として清水家に嫁入りすることになった。嘉陵たちは宮仕えの身ゆえに、未明に出て、深夜に帰る忙しさであったが、それも十月に入って婚礼も無事終えることができて少し時間ができたのであろう、目黒の明王院（跡には現在の目黒雅叙園）の紅葉を見ようと思いついたことがわかる。

この二つの事例で共通して見られる嘉陵の気持ちには、宮仕えの仕事から解放されたいと願う気持ちが表れており、「かたもさだめず」「紅葉みばやと出たつ」というように思い立ったらすぐに行動に移している様子が窺える。勤務から解放された喜びを率直に示す嘉陵の姿を、現代人の姿とダブらせて見るのは筆者だけではあるまい。自然あふれる田舎への憧憬、山を眺めるのを好んだ嘉陵の行動は、喧騒な都会に背を向けて江戸の郊外に出かけて「気晴らし」をする、心身の再生癒しの旅であったと理解することができよう。

おわりに

漬水家に仕える村尾嘉陵の紀行文を中心に、彼の江戸および江戸近郊への旅の様子を細かに見てきた。その文面から導き出される嘉陵の旅の目的や行動の意味、旅に駆り立てる思いとは一体何であったかを

探ってきた。ここで嘉陵の旅を総括してみたいと思う。

嘉陵の紀行文のいくつかを紹介してきたなかで、嘉陵の行動パターンには直線的行動と周回的行動に大きく二分され、前者には直行往復型・沿道立寄り型・現地展開型と後者には巡拝型と周遊型があることを指摘して、江戸在住の行動範囲はおよそ16〜20キロメートル内の日帰りの範囲に展開すると理解できた。都市内交通の新たな一面を提示することができたのではないかと思う。

さらに嘉陵が何を見て、何を感じ取っていたかその行動と心意を整理した。江戸時代の旅では、信仰と娯楽の関係がよく議論の対象となるが、嘉陵の行動のなかには神社仏閣への参拝が多いものの、その多くは宗教色の濃い行動ではない。中には、災厄除けの符を買い込んだり、安産の符を求めたり、お礼まいりをするなど、ご利益を求めたり、信仰に基づく参拝行動もあるが、それ以外では花見や史跡を訪ねたりする遊山的な行動である。

その一方で、自然や田舎に対する興味関心は高く、江戸の内と外の境界を意識する感性には鋭いものがある。江戸の外へと向かう旅では、江戸内外の境界地点に立って「ふりかえる」ことで江戸の大名屋敷や神社仏閣の豊を認識している様子を知ることができた。日常生活を営む都市での暮らしと、都市を離れて非日常の世界に身を置く生活は、今日の私たちが楽しむ旅行やレジャーの原点のようなものを彷彿とさせる。また、江戸の内と外との境界上にあって、喧騒の都会と決別するある種の儀礼的行為として「ふりかえる」ことが行われているようにもみえる。その境界線を越えると田舎の風情にどっぴりつかって鄙

を楽しみ、その境界線から江戸の内に戻ると再び日常の生活に戻るといった仕掛けである。

嘉陵の日帰りの旅はこうした日常と非日常を一日で切り替える装置であり、「気晴らし」をして再び日常生活に戻る、まるで現在における都市住民の休日を垣間見るようである。これを西山松之助氏の行動文化論にあてはめて考えれば自己解放する装置Ⅱ行為となろう。しかしながら嘉陵の日帰りの旅を、江戸以外の人が江戸へ訪れて行う都市型観光と位置付けるには難しいものがある。現代に見られる都市生活者の行楽やレジャーにむしろ近いのではないかと考える。だとすれば、仕事の合間を縫っては気晴らしに出かけた嘉陵は、今日の日帰り小旅行のように、日常の生活空間を離れ、非日常の空間を日帰りで楽しむ都市型の行楽スタイルに近いものを二〇〇〇年程前にすでに実践していたことになる。

註

(1) 西山松之助氏の行動文化については、「江戸文化と地方文化」(岩波講座『日本歴史』近世5)、「江戸町人総論」(『江戸町人の研究』第一巻所収、吉川弘文館)、「江戸の町名主斎藤月岑」(西山松之助著作集『江戸の生活文化』第三巻、吉川弘文館、三〇〇頁)に詳しい。

(2) 都市内部の生活、信仰、芸能、娯楽など全てを文化的活動とみなせば、都市において創りだされた文化は多面的で複雑である。近世における都市文化を考える場合は、西山松之助の行動文化論をどのように捉えるのか、またどう乗り越えるかが大きな課題の一つである。都市内部の文化的実像を明らかにする際に、個別具体的な研究も大事であるが、

都市全体をどう把握するかといった視点も重要となる。そこで「都市とは何か」を論じるのではなく、「都市の何を」論じるかを明確にする視点を提言したい。

- (3) 拙稿『江戸の名所と都市文化』吉川弘文館、二〇〇一年。
- (4) 拙稿「社寺参詣をめぐる研究の動向と展望―江戸およびその周辺を中心として―」『交通史研究』第五六号、二〇〇五年、九二頁。
- (5) 山本光正『江戸見物と東京観光』〈臨川選書25〉、臨川書店、二〇〇五年、八八頁、一〇九―一一一頁。
- (6) 柳田國男『百年前の散歩紀行』〔定本柳田國男集〕第二十三卷、「退読書歴」所収、筑摩書房、一一七―一八頁。原題は「百年前の近郊遠足家」〔文章世界〕五巻五号)、一九一〇年。
- (7) 森銃三「嘉陵紀行の著者村尾正靖の墓」〔森銃三著作集〕第九巻、「掃墓記録」、中央公論社、一九八九年、二七六―二七七頁。
- (8) 村尾嘉陵・朝倉治彦編注『江戸近郊道しるべ』(東洋文庫)、平凡社、一九八五年。
- (9) 紀行文から嘉陵の住まいを確認するのはむずかしく、三番町に移った時期も明確ではない。四代目を相続した将軍家斉の十三男斉明が漬水家に入って文政六年(一八二二)に賄料領地十萬石を賜る。しかし、文政十年の斉明の死後、入嗣がなく三度目の明屋形となる。三番町への移転は、ちょうどその頃ではなかったかと推察する。
- (10) 前掲註(7)。
- (11) 前掲註(8)、二十二頁。
- (12) 前傾註(8)、三〇五頁。
- (13) 前傾註(8)、二頁。
- (14) この六地藏については「銅仏壺丈六尺坐像なり。享保の始深川地藏坊正元造立するところなり。勤化の頃宝永三戌五月刊行して施財をつのりたる建立縁起あり。」と斎藤月岑編・朝倉治彦校注『東都歳事記』3(東洋文庫)、平凡社、一九七二年、一四三―一四四頁に詳しい。
- (15) 前掲註(8)、三八〇頁。
- (16) 前掲註(8)、三七九頁。
- (17) 前掲註(8)、三八六頁。
- (18) 前掲註(8)、一六四―一六八頁。
- (19) 前掲註(8)、一九一頁。
- (20) 前掲註(8)、一七二頁。
- (21) 前掲註(8)、九〇頁。
- (22) 前掲註(8)、五頁。
- (23) 前掲註(8)、一二頁。
- (24) 前掲註(8)、一五三頁。
- (25) 前掲註(8)、七三頁。
- (26) 前掲註(8)、三二八頁。
- (27) 朝倉治彦氏は清水徳川家第五代の斉彊を想定しているが、文政三年(一八二〇)四月二十九日生まれの斉彊が、「上めぐろ村に遊ぶ記」が成立する同年三月四日に登場することは無理であるからこの説は誤認であろう。
- (28) 前掲註(8)、三三二頁。